「里山資本主義
―日本経済は「安心の原理」で動く」



著者：藻谷 浩介
出版：角川書店
発行：2013年７月10日

この本は少し前に発行された本ではあるが、当時、もう古稀を迎えつつもいまだに勉強熱心な、しかも研究や教育関連の先輩でなく、あくまで私の趣味のスポーツの先輩が「若いヤツほど、この本を読まなアカン」と熱弁をふるっておられたほどの名著である。

この本は、NHK 広島放送局が「里山資本主義」をテーマに1年半にわたり制作、放送したシリーズ番組を書籍化し、出版した本である。東日本大震災の経験をもとに、お金に依存しないサブシステムとして、「里山資本主義」を構築しようというのが、この本のメインテーマである。

「里山資本主義」とは、簡単に表現すれば、生活に直結する水と食料と燃料を地域で調達し消費する仕組みといえよう。この本に則せば、社会的分業に端を発し、マネーを中心に完全分業制が成立している現代社会は「マネー資本主義」にあるといえる。「マネー資本主義」はアメリカを中心に全世界に広がっているが、東日本大震災において、水も食料も燃料も手に入らないような状況に陥ったとき、マネーは無力であり、「マネー資本主義」はその弱点を露呈した。そこで、「マネー資本主義」のサブシステムとして、「里山資本主義」を構築しようというのだ。

「里山資本主義」の事例として、第一章では岡山県真庭市を、第二章では日本だけでなく海外の事例としてオーストリアを、第三章では過疎の島として山口県周防大島や耕作放棄地の多い地域として島根県を、第四章ではこちらも過疎の町として広島県庄原市を取り上げている。中間総括、第五章、最終総括では、他の章で取り上げた事例やその他データをもとに、「里山資本主義」に理論的な裏付けを与えている。

私は「里山資本主義」について、「マネー資本主義」のサブシステムとしての重要性もさることながら、地域循環型社会の構築という側面に、興味が

わいた。地域間の人口格差、とりわけ地域の過疎化が進む原因のひとつに、地域内で経済が循環せず、地域外の経済を利用せざるを得ず、つまり就職口が地域外にしかないために、就職先を求めて地域外に移り住んでしまうケースがある。こういった地域に不足しているのは、観光名所でも、公共事業による箱物の建設でもなく、地域内で経済が循環する仕組みである。「里山資本主義」は、地域内経済を発生させ、循環させ、就職口を創出し、人口流出を食い止めるに至る地域経済の地域規模の合わせた発展を目指している。「里山資本主義」は、地域振興ではなく、地域経済の適正化に重点を置いていること、つまりあくまでグローバル経済のサブシステムとしての役割を果たすことに終始している。この点が「里山資本主義」の実現を期待させる最大の原因といえるだろう。

中等・高等教育では、とかく広い視野、グローバルな視点を生徒や学生に身に付けるよう教育に取り組んでいる一方で、高校における SPH（Super Professional High school）などの取り組みで地域の名産を活かした商品開発や地産地消をテーマにしたサービスの考案などを行い、大学でも産学連携などの取り組みで地元商店街の活性化などを行っている。我々教育に携わる人間が少し原点に立ち返る意味で、地域や地元を見つめる視点を増やす良い機会として、この本を手に取っていただければ幸いである。

起業教育委員会　委員
大阪商業大学　総合経営学部　准教授　北室康一